

こども家庭科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）
総括研究報告書

F-SOAIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システム

研究代表者 上田敏丈
名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授

研究要旨

本研究は、保育所において、特別な支援や配慮の必要な保護者への対応を保育士が行う上で、①どのような支援プロセスによって適切な子育て環境構築が可能となったのか、②保育所内での他保育士及び他職種間と保護者に関する情報共有のツール開発、③ ①②の知見を踏まえて、F-SOAIP による保護者対応の記録の蓄積と活用の実態調査という目的を検討した。

令和5（2023）年度では、①専門家が保育士への相談において求められることの検討をおこない、②実際の F-SOAIP 記録システムに基づく使用の課題と意義について園長へのインタビューから明らかにし、③記録システムの改善と公表、周知するためのホームページの公開とリーフレットの作成をおこなった。

その結果、①については、こどもが実感をもって行動しているところに目を向ける志向性及びそれを保育士とともに共有することが重要であること、②については、外部連携の重要性とともにコスト等の課題、それに代替するシステム的な相談機能の必要性が明らかになった。③については、複数の利用者インタビューから、活用に戸惑う箇所の洗い出しをおこない、また今後さらに必要とされる機能についての意見を徴収した。

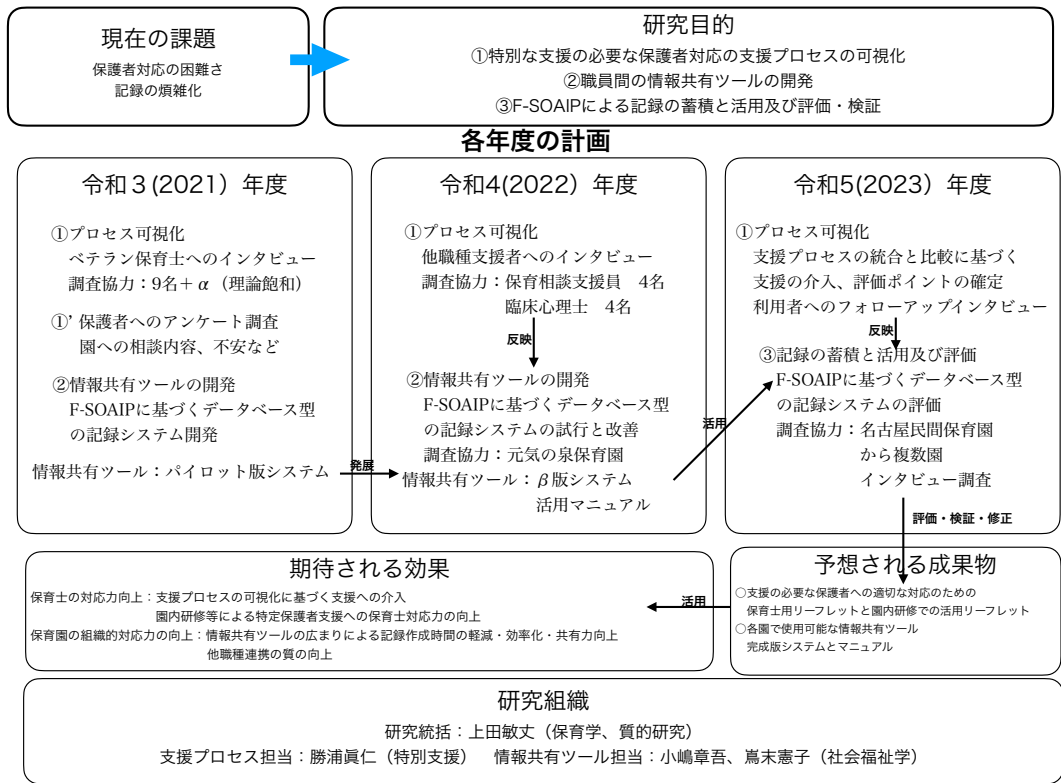


図1 本研究の調査概要と年度の計画

研究分担者 同志社女子大学 現代社会学部 准教授 勝浦眞仁 国際医療福祉大学 医療福祉学部 教授 小嶋章吾 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授 畠末憲子 研究協力者 大倉山元気の泉保育園 園長 中村聖子

保護者への支援について、保育士の役割が大ききことはこれまでも重要視されてきている一方、でそれに対する保育士の困難感については、これまでの先行研究においても報告されてきた(岸本・武藤 2019 など)。保護者にどのように接すればよいのか、どうすれば過不足なく支援できるのかということは保育士の大きな関心事項であり、関連する書籍も多数出版されている(例えば、西館・徳田 2014 など)。そして、このような困難さが保育士としての離職につながっていることも想定されよう。

従って、配慮や支援の必要な保護者に対して、どのように保育士が対応し、支援プロセスを構築しているのか、また課題はどこにあり、どのような組織的体制の構築が可能であるのかを明らかにすることが喫緊の課題である。

A.研究目的

本研究の目的は、保育所において、特に配慮や支援の必要な保護者への対応を保育士が行う上で、どのような支援体制の構築が可能となるのかを明らかにすることである。

そのために、特に本年度は、次の具体的な課題を明らかにする。

特に令和5年度では、これまでの二年間の研究成果を踏まえつつ、以下のように研究を進めた。

- 1) 専門家が保育相談をおこなううえでの必要なポイントを明らかにすること（分担報告1）。
- 2) F-SOAIIP 記録システムに基づく保育者の意識変容（分担報告2）。
- 3) F-SOAIIP 記録システムのホームページ及びリーフレットの作成（分担報告3）

B.研究方法

本研究を行うにあたり、インタビュー・アンケート調査については、研究者間で項目の精選・確認を行い、筆頭著者の所属する大学において、倫理審査委員会の承認を得ている。また、実際に調査を行う際には、配布先の所属機関との事前協議の上、内諾を頂き、拒否・無回答しても何の不利益もないことを確認した上で、依頼を行った。インタビュー調査については、事前に研究内容の説明を行い、書面にて同意を得た。

個別の研究協力者の概要については、分担報告書等に記載されている。

C.研究結果

(1)専門家が保育相談をおこなううえでの必要なポイントを明らかにすること

保護者とかかわっている保育士の抱えている困難感に対して園全体として対応しようとき、その1つの方策として巡回相談が活用される。この際に、配慮を要する子どもだけでなく、保護者対応も含まれており、これまで数多くの実践が積み重ねられており、保育現場への様々な還元もなされてきた三山, 2013)。

専門家はどのような観点から園での巡回相談を試みているのだろうか。心理士や言語聴覚士、作業療法士など様々な立場の専門家がいるために、具体的な巡回相談の視点が十分に検討されてきていない。そこで、巡回相談をしている方と関係発達論的観点から巡回相談をしている筆者らとが語り合った内容を検討することを通して、巡回相談をする上で専門家間にどのような観点があるのかを明らかにする。

研究協力者は、ある地域で言語聴覚士をしている田中さん(仮名)である。インタビューは、X年12月およびX+1年3月に、それぞれ約80分ずつのインタビューを行った。分析は語り合い法を用いた。倫理的配慮として、本研究の目的および手順を書面および口頭にて研究協力者に説明した。

結果として、浮かび上がってきた観点として、子どもが実感をもって行動しているところに目を向けていこうとする志向性、および、課題の解決に囚われすぎず、子どもが今の状況をどのように理解して、その持つ力の中でどのように動こうとしているのかを保育士や保護者と共有していくことが、2人の語りの共通項として浮かび上がってきた。第二に、コーディネートできる地域の人材がいるかいないかはシステム上の重要な環境であることが、第1筆者が巡回を行っている地域との違いから浮かび上がってきた。また、保育の営みの難しさを理解した上で、どのように伝えることが保育士に受け入れてもらいやすいのかという課題が両者に生じてきた。

提示した以外にも検討すべき語りが他にも多くあり、包括的な議論がまだできない点が不十分である。今後も語り合いを丁寧

に吟味していくとともに、他の専門家との語り合いも検討していくことで、巡回相談における観点を明らかにしていくことを継続的に行っていくこととしたい。

(2)F-SOAIP 記録システムに基づく保育者の意識変容

本研究では、項目形式の記録法の一つであるF-SOAIP を、保育所における保育記録へ援用したことによる、保育者の意識の変容を明らかにする。約1年間、F-SOAIP を用いて保育記録を書いてきた保育者12名にインタビューを行い、インタビュー・データをうへの式質的分析法を用いて分析した。その結果、①保育者個人の記録の連続性「流れ」への意識の変容、②保育者間の記録の連続性「つながり」への意識の変容、③大切なことの実感と再認識によるダブルループ学習への変容、という保育者の意識の変容が見出された。

F-SOAIP を使って記録を継続する中で、保育者は保育記録を書く際に、F-SOAIP の項目を用いて自分なりの「流れ」を意識するようになっていた。例えばS(子どものことば)→F(活動のテーマ・ねらい)→I(支援・対応)→O(子どもの姿)→A(気づき・考え)→P(計画)といった「流れ」を意識することにより、保育者個人レベルでの循環的な保育の過程を負担なく実行できるようになっていた。また、複数の保育者が保育記録を共有する際に、F-SOAIP の項目を用いて、保育の連続性を途切れさせないようにすることを「つながり」として意識するようになっていた。そのことが、保育者の思いや保育の意図をつないでいくためには記録を共有することだ

けでなく、保育者同士の対話が必要であるという再認識を導いていた。

さらに、記録を書いたり読んだりする際に、個々の項目の内容に着目するようになっていた。例えば、Aに着目することによって、保育者同士がその人らしさを分かり合えるようになったと同僚性の向上を実感していた。また、子ども理解におけるAとOの迷いから、見えないが感じ取る体験的事実としての子ども理解、見ること・聞くことができる客観的事実としての子ども理解の両面があることに気づききっかけを得ていた。同様にFに着目することで、保育者によってポイントの拾い方の偏りがあることに気づいて問題だと感じ、共通の視点、多角的に保育や子どもの姿を捉える視点として、保育所保育指針に示される5領域などの共通の視点の必要性を実感するようになっていた。

(3)F-SOAIP 記録システムのホームページ及びリーフレットの作成

本研究では、作成した配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツールについて実際に使用した園長の聞き取り調査からその評価とさらなる展開の可能性を明らかにすることである。

本システムを使用している園から、特に使用頻度の高い2園の園長から、フィードバックを得た。インタビューは、2023年10月及び11月に実施した。

インタビューの結果、特に配慮の必要な保護者への保護者支援をおこなううえで、初動対応の位置づけとして、相談支援機能が求められること、また、記録システムによる記録が蓄積されるに従い、分量が多くな

るために、特定の幼児や場面に対する要約機能が求められることが明らかになった。

D.考察

本年度の調査から、配慮の必要な保護者に対する支援プロセスとして、外部との連携による専門家が、どのような支援の観点をもってかかわるかが明らかにされた。また、F-SOAIP 記録を用いることで、保育者の意識変容が促されることも示された。

これらの知見をふまえて、現在、稼働中である F-SOAIP 記録システムについても、使用者からのフィードバックをえて、より効果的な活用視点として、①相談機能、②記録の要約機能が求められていることが明らかになった。

E.結論

以上のことから、F-SOAIP 記録システムが、特別な配慮を必要とする保護者だけではなく、それらの幼児の記録に対しても有効に機能していることが示された。また、今後、さらに効果的に活用していくための展開の方向性も示され、システムの安定的稼働と、今後の機能改善も含めて実施していく。

引用文献

岸本美紀・武藤久枝 (2019) 保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造— 先行研究の分析結果から—。岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要 52, 39–46.

西館有沙・徳田克己 (2014) 配慮の必要な保護者への支援。Gakken.

三山岳 (2013) 障害児保育における巡回相談の歴史と今後の課題。京都橘大学研究紀要 39 巻, 135-156.

F.健康危険情報

該当なし

G.研究発表

1. 論文発表

1) 勝浦眞仁, 藤井真樹, 上田敏丈 2024 専門家が巡回相談において求められる観
点の検討
—語り合いを通して— 総合文化研究所紀
要 41 印刷中

2) 中村聖子 2023 保育記録への F-SOAIP 援用による保育者の意識の変容.
国際幼児教育研究 30 67-81

3) 寫末憲子・小嶋章吾 2024 DX 次代の重層的支援体制整備上にてPDCAサイクルを促進する F-SOAIP~EBPM をめざして (4) 自治実務セミナー4月 40-46.

2. 学会発表

1) 上田敏丈 配慮の必要な保護者への
保護者支援ー利用者支援専門員インタビ
ューから TEA と質的探究学会第 2 回大
会 2023 年 6 月 11 日

2) 上田敏丈, 中村聖子 F-SOAIP による
保育記録システムの開発と活用, 日本福祉
マネジメント学会第 4 回研究大会 2023 年
11 月 10 日

3) 勝浦真仁, 上田敏丈 保育園への巡回
相談記録における F-SOAIP の活用と課題
(1) ー衝動性のある幼児に対する配慮に
着目してー, 日本教育心理学会第 65 回
(2023 年) 総会 2023 年 8 月 10 日

H.知的財産権の出願・登録状況

該当なし